**Ⅱ. 一般演題２**

**（症例報告 発表7分，質疑応答3分）14:25〜14:35**

**2.4**子宮頸部由来の癌肉腫が最も疑われた一例

横浜市立大学附属病院　産婦人科1) ，病理診断部2) ，分子病理学教室3)

〇　松永竜也1) ，紙谷菜津子1) ，今井雄一1) ，水島大一1) ，

ルイズ横田奈朋1) ，西尾由紀子2) ，三田和博2) ，古屋充子3) ，山中正二2) ，　大橋健一2) ，宮城悦子1) ，

【はじめに】

子宮頸部に発生する癌肉腫は非常に稀で，上皮成分と間質成分の双方の悪性細胞が混在した腫瘍であり，その性質上細胞診にて組織型を推定することは困難とされる．子宮頸部由来の癌肉腫が最も疑われた1例を経験し，組織診断後に頸部細胞診を後方視的に検討した．

【症例】

52歳女性，難治性膀胱炎の精査目的で撮影されたCTにて子宮腫大を認め，婦人科を受診し，子宮頸癌の疑いにて当院へ紹介となった．腟鏡診にて腟部は外向性に発育する6㎝大の腫瘤に置換され，一部円蓋部まで浸潤を認めた．両側傍子宮結合織は骨盤壁まで達しないが浸潤を認めた．

【細胞所見】

出血性炎症性背景で，N/C比はやや高く，核の不整及び大小不同を認める異型細胞で構成されるシート状集塊が多くみられた．その異型細胞は，クロマチンが粗造で核小体が目立つ細胞が多く，一部はクロマチンが淡く，核小体の目立たない細胞の2種類を認めたが，周囲にオレンジG好性の細胞や奇怪細胞も見られ，扁平上皮癌を第一に考える像であった．

【組織所見（生検検体）】

凝血塊に混じって好酸性の細胞質と明瞭な核小体をもつ異型細胞が充実性胞巣を形成していた．一部に淡明な細胞質を持つ腫瘍細胞や紡錘形の腫瘍細胞も見られた．免疫組織学的にはCK7陽性となる上皮性成分とVimentin陽性の間質性成分があり，生検においては扁平上皮癌と子宮頸部間質肉腫との同所性癌肉腫を最も考える所見であった．

【考察】

癌肉腫の細胞診による診断率は決して高くないが，本症例においても細胞診のみで推測することは困難であった．今後放射線治療後に子宮全摘術を予定しており，最終診断と併せて検討するが，上皮成分が扁平上皮癌である同所性癌肉腫であったため，細胞形態学的に鑑別することが困難であったことが考えられた．